

イチゴの高設栽培システムに 育苗用連結ポット「Dトレー」

定植不要で省力化

イチゴ栽培に取り組む静岡県菊川市三沢の三倉直己さん(57)は、育苗用連結ポット「Dトレー」を使った高設栽培システムを考案した。苗は、栽培ベンチに置いたトレーからランナーを伸ばして取るため、定植作業が不要で、初期投資の抑制と省力化が図れるのが特長だ。「作業量は4分の1程度に軽減した」という。また、従来の養液栽培に比べて1.5倍以上の密植が可能で、10㎡当たりの収量は6トン以上を実現している。

静岡県菊川市 三倉直己さん

三倉さんは、5棟・1400坪のハウスでイチゴの超促成と促成栽培に取り組む。労力は、家族3人とパート5人。品種は「紅ほっぺ」を作付ける。Dトレーを使った栽培は、促成イチゴの一部(200坪)で行う。トレーは12段間隔にD型ポットを連結したもの(5×2列)で、ポット1個の容積は250ミリと小さく、培地にはロックワール粒状綿を使う。

育苗は、栽培期間中に果実をよくつける株を親株として5%ほど確保する。収穫後はランナーを伸ばし、別のポットで子株を受けていく。三倉さんは「1株から10本との間に1カ月ばかりなら」と話す。

生育は摘葉などを行ってそろえる。栽植本数は10㎡当たり1万2千〜1万5千本。毎年、病害予防のため、親株の半分はウイルスフリー苗を購入する。

少量多頻度の給液
高い整形果率に

苗はDトレーに入れたまま栽培ベンチに置く。不良果の発生が少ないなどの理由で少

1.5倍の密植 単収6トン超 コスト減 作業量4分の1

ゴは細根が多く腐りやすいため、繰り返して使うことも次の作業への影響はないと説明する。

環境制御を適切に 高糖度の果実生産

イチゴ定植作業の省力化を図りたいと考えた三倉さん

「培地の量が少なくイチゴにストレスがかかっているため、適正な生育コントロールが必要」と三倉さん。「環境制御さえ正確に行えば、高糖度で締まった果実が収穫できる」と話す。

暖房費節減のため、変温管理を行う。この時期、日の出から午前中は28度程度の高温で管理し、10時ごろ

「この栽培法では不良果の割合が少ない」と話す三倉さん



「この栽培法では不良果の割合が少ない」と話す三倉さん



「培地の量が少なくイチゴにストレスがかかっているため、適正な生育コントロールが必要」と三倉さん。「環境制御さえ正確に行えば、高糖度で締まった果実が収穫できる」と話す。

「Dトレーを使うと簡単に根の観察ができる」



Dトレーのサイズは縦50センチ、横20センチ、高さ10センチ

排水対策を徹底

【愛媛支局】水田約5畝に裸麦「マンネンボン」を作付け、排水対策を基本とした多収栽培に取り組むのは、西条市水見の越智優行さん(26)。2009年産は、播種期の天候不良で湿害が発生し、県内の平均単収が2775キロと低かったにもかかわらず、516キロを達成した。

栽培経験が浅いため、祖父の正雄さん(81)に教わりながら作業を行う。「裸麦を栽培

までは換気しない。午後徐々に換気しながら20〜23度を維持、夕方4時ごろに窓を閉めて温度を確保し、加温して光合成産物の転流を促す。8時ごろからは6〜7度の低温で管理する。

Dトレーを使うとトマトの栽培試験を行う静岡大学農学部の中谷明教授は、「この栽培法ではイチゴを植え替える手間が省け、少量多頻度給液のため比較的薄い濃度でも多収が実現できる」と評価する。

資材費は、トレー、架台、給液装置などを含め10㎡当たり約300万円。高設栽培施設では、従来の半値以下で設置が可能だ。三倉さんによると、この栽培法には「紅ほっぺ」のほか「ちちおとめ」「章姫」などがほのか」など密植栽培に向く品種が適しているという。